手習 五十三

E23
48

東京大学総合図書館

東京帝國大學圖書印
B 7874
東京大学総合図書館

うゐよかはにおはしける恵心僧都と申していとたう
とき人にすくれ給へりけるか五十計
の侍りけると有けるかきゝ給ひありてをとり
遣して布施なとりよ川まうし候へとて
しけるあさりとそ人に仏経なとうすへきとたまひ
なり給ひておほくしてかへるみちよりある坊にて
いおやの山にはなれはさふらひこれはそのおやよろこひあ
ゆつきたれはとて待てけるに道とておほ
はりへとりてはなれしかゝるなかりふかきなりける
人の家ありけるなりてかくてなかに居とゞめて

まつ小野侍従なりける人はよかなにせうそこきこえけり
出ゆりのほいかくちかしは侍てしと思ひけれ
ときてのいさ﨑みやかやのみてのあてまてきこえける
よおもろきて侍うき袖しめりける所へいてある
わか人の涙と申つるもてよみなきてなんあはれ
うちはへくと侍へあはれしきつて見んさけさえしける
侍つるおいなつかしのきりくさ侍をはいかにこころ
なさけふ思ひていひけるは侍ていと宮の御事と侍と
神しら思ていとせちくしつゝしわすれは宮つく
いてなむ人きにほかかとかへりてまいりてなくさは

いひかけまえ故朱雀院の御位まてうちの院に
おはしまさけるはしめおなく院より御そうの
まり給うけれは一二日宮よりとひ申給ひけれは
けるをりにむかし御かきりはけるとて母后さ
宿もりの人きこえとよひてかそさてまつりおはしまさ
かくて侍りつるの院の三人ならすそ御めのとかへりて
れ人のつねるそやまり給と申ハいとようのおかけ
下向まてて人もかくれやよろこひまてて見させ申給ひ
おきつれまつてもく宮とう人と見らなはあけけれは
おのそれの去りらひたしてきこえりきつ信部

わうの給ひて信さしわまでおそろしけれバ示しを見
給て太とこそら經よみたてし乃給ひけるをにそひろ
しあやうしとおもひし座をわたりしけりまことの御
法りうつきしてて京極の昔らう法にひらきせ
らく人をしもわうし給のかいふ小さまてうりけるを見
ゆつ未乃志ともうに聞けるわたり中を見ハ思ふ
乃をろきつまめつひとりありさまミゆつるハ何そと
立ときんまて火とおもくみまてみまいはやかうき
そくりきつ孫の座んく忍しまうにそしこあハ
さしとてひらりハしはこつしあゆそよりしけりし

あれよりおよりのめおりむしといひてさやうれしの
ありそくへきうんをたてりはしなすうふちなく候とも
かしらのうこおもハやうりめへきちらすかまいたくろう
あの太とこそかりもおくおもきたちまてたのうり
てそれ捨御局ハうこはみうくたへくとして太きつれは
また孫はいとわろくしきてよりわそていうらしうなく
あつしき手本に候る信部乃四房にいうらんせさ給
まいらせといふ座ハけふおもき手ありとてひるう
申てらう法ハうちんと中をきうつそ乃人に座んく
急ぎりといひもりうきはけをまくみおねむりまてわ

さめておりて たゝみのうへにちかくよりなんとおもふに
よりてけるとて 御姉たちもしきハ 見千万のあはれ
うしきまとも をかしはわたりに侍るゝ物ありけれハ
ぬきつまりおとし きてのまたいかなる人にてものし給ひと
見はなちけることのわしおや きこえて時のうつりまて
みるにて 我明きてなん人の侍ると見あやしさに とも
むかしの人あり 其言をとりこえいんをはなちて むかしの
きのくやおもひなんそいへ人に ゆかしかりしうらめしき
物まあへにまかりて ここの人のあかりたる人たにあかめすそ
あかきとも しきりなるまたりくる人をとて そゝり給ひけるに

くりなかりしハ ねむごろにのたまは 人をとゝめ此院のうちに
とて侍しかとも 御ことに 人なりとて ものゝ様に まか
この月ころ おもしろくまかりてきてのちに 侍るを
ねひんなる侍りけれハ 宮つかひある人きこえけるに 侍る
ゆ給ひていひて ありつゝ 宿とりみれはのこととらへむ
此ころふるさとを たちかへり 侍りし 此すみにひとり
あけくれいてこそてりらてみハ わかきゝかすをやすまれと 給ひて
はゝなるもおはしとて見んするもいま一度 ゆかしくまいらせ
此まうちきみ その御時まきこえさせんとて 侍るとも
此程にお侍る人のこれをうけたまはり給ひ けりて そうて

東京大学総合図書館

されしもかく見えさりけれは侍りきさそてそれこそは志よ
庭志めしよせ御いきて侍りける様はいかにいはん人々をとは
ひやうゑのすけ殿にてあるを御らんし候てとおもはれけり
つみ新田の四郎うけたまはりさるへきもなりいかにもせらるゝ事も
ありけれはいとうのとのゝ志かるへきわさもなくみなよりて
けりのおはしませは法しのせられける所をいかなるへき様に
こまかにかたりの御あそひせしのちきんさきのおほしまさはいか
えうのちなりしかはりのへくときてらるへくよりてひけ
くらかをひきいれてよくまくいてはかなはぬに
そのおもむきをいひさためられたりける中を候はんかとなんと

きこえしかはいかにいはんかたなくわうかつはかりなりけれは
いやおもんとむかし川之名をたのみしかはいきさしは人
まうせんとおもひてきわめはいかさまにせんとすまいらん
侍てこそいはたちかくなにとてあるへきさま
かくれなきものありしとて見えてあしとおもふ事はい
そのかはりあらはしてさてこそ人にはおさへまてて侍り
あはれにまうすはこそ候はんとて八幡大菩薩
のちにむかしのかなしかりし命たまはりて見せ候てんと人
それはたのもしきことにしたまはらてよと言ふかなしき
ところにひとりもあるかなしきかたをみてなけけ

東京大学総合図書館

御むかへをねかひつる人々今々と待きこえたまひけれ
と、あら一二日ともしらすまします人々におはしまし神
かくつゆ程もせましき人にならてまし人々ありとうれしくて
もさりとも一さ度の志に付て人々を相ひてそあるましきを
けれは、いとゝすゝみ給ふ人々さまさまにしめし合せて志して
此人々のまゝにせましうして有らせけるにもらん此の井に志給へ
又きつりにありと〳〵御給ひて此大きにして伝へきには
御名給ひとてしうてたゝ〳〵きこしめさるに伝へてまうらい
給ふ人々の御はつりにようて御礼ありとまうしてけるかみる
らすいそきかへしとすゝめとしいうてありし又此の御物〳〵

京にてあまりおもひて〳〵いかなる人々もうは思ひうら
うしなひもせんにいかにてきこえられはかなと心くるしう伝はね
けふなとといひとゝめいうしく〳〵おもひいそてゆひなきその
あまたは人々給ひりかりあらくれたるにこゝろさま給ふ
御車よせく〳〵おくり給ふ程伝へて人々御しうり給ふその
時御志うてしたまひけりて信部ありけり人々にいは
ありのさまにいひ給なよ〳〵として物しいはれにいきて
しはらくもなにゝゝのよけくれたりける人々はいそと〳〵
といひさためおはしき君きゝて給ひて何事そわかと思して
此よ給なむ二千にあまりなんありて給ひ物と給はなと

の姫君ちきつきましてまゐるの寺まで見んと思ひありき
いらせ給ふ人をまいらせの前をむかへてきてて姫君
さてこれをみんしの御ありさまにまいらせんとゆるさせよ
といふはさきこえさせて見んとて人を見よりつけてそうして
とねられるにはつこいりつけるか女の御身の御座
のきみありけるかさ様を見ける井の大殿そきてつらいにて
うるさくてそれにて思ひけるにとりてまゐりけれはたてまつ
さひにむしさせなるかなりけれしらせまりとてさ
くこまらとゆるしてそれにて中さすす給ひけり侍せ
うきあり御見る人はおもふしかくて侍とし侍まい

いけの御まへへわたりてさすらひたまひはのゝり見んあけ
身つまつ姫君の御座給ひける人にかくてかく神姫君のと
おもしろき御殿しめまりてつかすらひはまるとすり
たよりつくたしいの御所給ひける年くにこうきこゆ
るまてこの人をかくなりわる御らし姫君と申んは
也おきりまいらせ給へはそあやしきこゆる也あつかひ給ひと
いひて見えしのたまひ給ふとてかくの信部とも
也こそきて給ふふそなにの志わすれてきこえて参らとも
の姫君へといとよえけりきてはてかく給ひしはしたえいふ
給ひすなたりの家ちひよきりてわつらひせきこ申

かりのせんにゆきし人々こそ後のまにまにあふならむとて
すてけりやはとてさせ給ひしみ給ひ御ありさまにと
こひわたりあはれなる人々はききもすゝむるにつけてもきさまりそ
ゆかしきにくらくらとおはしけるはいかにもやうやうに給ひけり
しける人々をいけどりて御かへしきつして此つまにそひけ
かりそめの人々をとみなせにかはかおもひしけるを給ふ
まみさしこの人々をかりあるひはひとつくるはかたをふこ
きくわれんわけまとしつゝ涙のつきせぬなみだとゝめ
みなみなやまことしくいはしとおもひ人々のかゝりける佛かん
道ひきまつりと思ひきこゆるとひかくれり給ひ

ありまとやまりんさは人々ことに失すてなきくわんぎやうめ
給ひの御給ひてひとつの人にまでうらしてはきまた
たりけれはあまりきはまりての人にて人々にみえせてかな
これ御まはりしは御てまかせていまのおもかげはゆきに
もしくは御給をとられとおもひはかなはぬもや給ひけるにも
くはの給ひはふかくゆかしき中にはれりしつゝもと
ありしも御かはとやうやうみよりきみやあはれ人々して
みまてとかくしもゆかしきあかくろうつけまいらせ
しくはれりもことはかく人々のおもひきこえ給ひてはぞ
きこえぬはかなやとしたまふころしかりかりけり

東京大学総合図書館

やうの人とはかりこちすゝめたて奉れは御しき
ませられけるそのやうりなけれとわかのそこの御はたつ
まつりなくてなつかしますますなりましてこのうひおかなし
ゆめのうちにいとあはれにてひめをきこしめしけれは右大臣の左大将
とはかなくいのちにこゝろにまかせてこのかなしきにそ
ふかくおほしめしてうちはへ給ふそのなかのなかにもかなし
ことはかなきつゝ給ひてみちのはゝえさせ給ひけりと
いはゝやうの人の玉しかとおほしめしのこりてなけれは
にわかに思ひたえて給ふおほかみのありともおもひたまへ
うくおもひしとおほしめしへつらんに心のうちなんとはかなし
く

とくし此弁のきみなんと御こゝろもとなくは姫をこれも
ことにきこえて御ものかたりもし給へりとは姫けにこなひ
うちかひて大なんとそれの御くし右大将は言
のみかみ給へりしいつきの侍つゝ年ころなりあはれ
ゆきをいひと姫よりおんみやうしの宮にてとすなり給てよに
ことにおほせしおとゝは姫の御君より思ひたまふ
もかくさのまいらせ給ふに御はなりひさしう思ひせん
とひさしくもそれの人いかにもことわけしてみちの
おもて侍りの御はなんと思ひやりもゆかしきかへり
東おほ(だ)内にしておい人の御ことつたへありけるなり

かりつきのありしハ人をまちてかくれゐたりけるハ極ひとり
ありそひくみちをたとりゆきつゝ庭に車をとめてゆ
きしりみとし給ふに内よりもみなのひと袖下りてそす
給ふらそこにおはしけるに程いとも中屋ゆかりと
りつく庭よりたちみをしひて御つけておはしつきあ
そうつハおほやけをおかけしむすめのあまきみハしきりあ
人をとらへて見てみな住みきおもひつゝ庭に出ておい
のかまへのひけとしなきこゝろしと思給ひて侍こ
らん宿なとそ見つゝいひ給けるにわかくよろう
あり給ふかれハ僧都ハあるり給ふに人のなんみて

きこゆるなと思ひしにあはれなるはよろつの事なとにいみ
ありし人はいままてにあま君もこれにならひてる世を
はなれし御孫なる人をやあはれと思ひて志いかはかり
そうあはれ人のうしろめたうはゝ人ゆかりかはさ
さん地まうてなと志つりしける人のたちかはらぬまてにはむ
むしときうけなかりけるの人たえりておほせら
まゐらなくてはりけれ宮の内にめくりてもとこえし
ひとしらすに地もはかなき給ひて孫いてもあはれ
なく思ていはれしの人あまりてこそ思はくや
しておきこあらぬもありいとお庭ち時に柳まて

東京大学総合図書館

はかりハく御しき人丸をとゝめられしか柿本を
とらハ石見国へなかされてたてまつりけれハいのちを
しあさりめて志ゆひ屋うそりきまし庵くとせさ候
給ひらん人丸くあはれに存し宝五月にきぬめいとまひ
きこうひなきことさもの御代信部の御はかにおさまり
給ひても人丸すけれ人丸すまふふさくまいてあるハあは
ましかりける人とつきさきこもやうしたる物かたり
ねこそわれまもあの仏京よりて給ハしこそ何ぞとて
まてハあ人丸んなとしいさしきことわりきろけてなき
もとの人はまはいとあ屋しあ年のかくへまてかきて

人丸の命をたすかりさてて御しかりの宮に来あり
てこそハ神とも見つけかたくみこそみけりてんかし
それより御ことい去つきこのりとおもてんとそれ
給ひよりさるとてて月のあふりさ流とさうし
うなかはつる後人丸むつましの年ものつつあつ
庵ニさ候ゆてくそころ人丸いとをあはれけに給ひける
尓おくほそ物し給ひそ給りとみておかうしらて侍
井あめのわさ給りあとおあかくのの給へ見つけたり
かつのわか人丸のこありさ海のかそれこそ御のうき
てみ給ふけまいとき御うたくありける人丸のうたに

なく〳〵御むくひはこそうはかなきあはれにおもひそへ給
けり侍りけるにたのひまてかくうこみたれ給へんとし
さけやときつれなからうちとけねやうてひ給ひつま
ありしゆうきものし何となけりその親王給ひつ人と
の給へいかにいそまにえんまとうしひとはしたちひ
すり給ふあまのなき二年の侍りてかなしの給ひあま
しかり給てきゝえそてかてありきやけりうす
そにきくゝのすゝめくちりたりし山にて給ひてきて
給りける人にたのふかんおこすひさへ給ひし
わかきてあかんいと宮にくろへしまし中子れもい

ひて今まきのせしとうく奇僧都とてありけるが清太とこ
もうつまにむさんのほしまていむとのみうけり
陰のあひいかうてなれ女のえちまつ量てまさく
そまりうちに丸やまりてもとよりひ二年まわま
うまていぬきうに今のまうしれおんいけり今こまこそ
なわうちきれ給へいちうる今をゆとひんけく侍
ひあしたり給へかうれきすもかりなこしと心
ようし次のて候ひものうけゆ見しうらへ
とこうし我たうとせひ給ひ來ひとよりけ給
御うわの川我まかりうけしくあにんまれわく

人を恨うらむる事なかれとあり論語ニハ躬をせむるはう
て中々のおもひいりくるしむ給はゝ任をうすく
あるをもれはうつろもなけてうせむるものハにて
まて心をきゝてそらくしてうせむれはうらみありて
わするしハおこなはせし給し任をうらみ
せりうらみをいたしてたゝうらみありきし給はさ
女のあまりくすを給し恋りけるつきてうらみう
しきひてしはひ人ハ心を無恨給て我悔て
あなんといふ梅をようこふの給しまたりとて
いふ[illegible]給ひ神給しとゝりてしきれハ

観音さへ海ミを海上にてくて給けるハ武信起上
まけなりしとハさかりなんとねたましく行そ
とこハつきあるへ衆生のおけなやみかくしくて
いふそ給ふしれこ人ハ給ひやうふハ給の梅あれ
てらんまつしたまハひとりみし人のおハぬくこ
みなおいおもしいかさまへ人のもねたさあれし
大あるみくみてきつふゆるもりくてゆしあり
よ給まふハつまてゝすこらん恋あれたハひし人とたま
あつはたらくあくしてまれしすたるゆまハいきつりそて
仰くとなけし人のし任はくまきつたゝすらくとせたく

思ふつゐはいと侘ひしと物を思ひまさりけきて名人
此神々にかみつまと祓をはちて侍て毎月志よ
聞えけるに河原にわたり桜花咲てしくさ花よりも
おそろしうしはきてかくゆきかよひておそろしてす
かこれなりしにかはるとはなおそろしくはいく度まさりて
も御ともにさしくるしくてなをそろふにて名に侍らく
さまよそせおんと思ふしたこの御にてて人見え
なけられんりもいちにてなみてくいにしなりと侍ひ
つてはくもとおかりしとへてきこらけれはかとこれ
よりきていさしも何かとも人といひていたく候ち

此せうと宮仕へしける人の紹とおそろしく様ら
わか御もとひてりなりおなりしかみのかりし御ときて
此男はきてうせめと見てとほするくはいふなるとも
せんなりぬと思ひていみてうなくてと思ひし様よ
うけ侍るにはさて毎にていかにしくおほしと人の様
とこそけれはおそろしく内侍て宮にはいりいふなきと御
しろめる人にありける見てはんとまつりつる
ありくていきこうかめりかしおりてくらおし
なれはいつしくおそろしてなかくしこえつる御所
さはりてなきこと海まで物はいとゝわりなきうちて

なりつゝと扇たてりけるぬれ給ふにまいりしを侍りあれて
くたのりしけるなるをは、おはするをみそかにみるなと
し給ふはる時は此姫君ゐくらふかみへて給はゝかれし
う思ふ所にゆきと心てなくくたゆむおりいかくそなき
てありし所にて給ありあんへしもありつゝしきいさあら
るらと為まいは、心をはゝへてそ打ゝ海とりなる
なるいふ我侍りて差なんとそ思ひわかり給へと仰はゝ
まにて侍きと有りうか人々はちなれいひと差う
行くて座くしかりらをとけ給へは抱さらいりなもし
し給ふそ中くしあやし座せりてゆくいふ仰りくと猶

あつ思ふ所にゆかりにあ海より給てよさそめちゝ侍ん
いく度うもあひ合きことの給へハと仰けるに此招をとい
うてうたハなしさすらんとてたゞ侍らりききてそへりなき紀五
ふいまう実はをさする心をとゝれけまてとりてとらおれく
しきこ人のみふてえはしく志かてもかはをす
備部ハ六波ハの許よりて侍さうり座めせすり給へと必ひを
きそてめちかり給ひ参みの座ゆふあは人をみへてそまする
るまとあさ為いふつひてせけそておこつしきと使ひく
しそつゝゆひてうら座りありつまても侍らうも
みされ無とさこなてたまハ法やくくと宰相らしひと

東京大学総合図書館

ちたるめはいつらこそおもへる恋ゆへてやてあやしはいらし
き天人のあはれてまかりとおもふ人々侍れしおもひあ
さらさきたちすまてもなくく侍しもうくくらうらに
しきおもう身にゆるゆかしさとそておもひ給はつて不
たまひしきこてし人々中のあはれにてさ侍りさと
せめて御心とつけつけしと思ひてあさまし身は程
なり御所にまいりてはやあらじありえし御心えて
たまふおきてしさぶらふとたはかりさりおもふ年とて大
只侍りてこれ世をなかりしと思ひて御心なりなれ
はかなきみえし程なりまへちりておもふさうらふ本ゆかし

あさましき人の侍てこそてあていくたちかなんせんそ
まいりけり年は我みちの誰とも思ひおもひ侍るとて
いと殊なるけれとひかりて世中にいかなりけるとて
侍りて人々に有様しきてはかる人にあはれなるとて
あやうくそとてあはれ給ありなん御心をといふかしとおもふ
しかたいへ三年すくる姫とみる事たり給ひ所
ごらんおさなき姉よりもかくしき御心ちよろこに給ふ
御ゆめひまにきてしらせんとすんと志い御心なくそおもふ
なりしあるしとあそたる人々ありなしむとわか妹君
かくてかくなれ心のさくまてありなりさる人々なくけり

ゆく／＼給ひもとらてひとりを侍らしくかしつきてよ
もすこしもさらとむしろにてとりあけひろるとう
むしとめの君のおくまりぬけまゝなうし侍らしと
とりいりてうちほゝて人々は山里とふかすこゑ
めくらめりとうてち成とは人々のこみて
おもひさへ人つ思ふしも人をふみ見なてしみと
つましくなほさきまってるとあけきこゆるけくお
これよ人々うちけとひてさめりさ高めをえてれ
いなうかとしもかしせあるしきこゆしあらう
まして思ひまされといときこえけるしあらく

まちしおそえめり音の山里と里ハ松の音も
ありまめりつくり高ゆへあるおもしろうおり
うせんさいもおもしくゆへをほとつたり秋まあり
ゆけハこゑのそしきつゝ哀なるを門田の稲葉から
とて夜りつ音ある袖まてひとつつわきこゆるに
うたうひ吉しあそりひそひ弄かうにとも
おもしく見えしあはさちよこと思してとあかおほくう
此夕まうりの宮と夜お在し山里よ里ハしまこう
いりて山まつけうら家あれハ松陰よけく風の音
もいと心ほそきつにつきくとはたこすひとのそゝして

東京大学総合図書館

いつとなく忍ひやかにしのひ宿りて月おもしろきにかの衣
たへきんなきに元の結ひかはしの袂なとは何人への元は
いきなかりし情のあさふかき情まさりしはしれやつまく
あらにあきは梅昔しおもひけるあまりにて元の
とくゆかりまさりぬるほとすへて秋くれなるも
侍りてかくありしあまき淡の涙にあらはれそよそほひと
うれしとも紀はるかの人の心とおもふかたもなくてつけ
ては思ひはいかになおさ南の袖をぬらしけるとそ聞
しられけるはへてすこしは
かれなるけし涙の河にやあま沈みしをおもひつつけ
て

誰かよにかしわたのはらかりぬるけるはいも来たらし
うきくしと申しあまりて思ひあはれ月にあかき
哀しく思ひは人々は物くるしきとおもふにはら捨人
ありてなけきにはしくしと打なかて
秋くれてすきこ世の中にすみ侘て誰かはとはん
月の都にしはしはすみとよりし程はなきこ人お
かりしよし人の情と思ひてられ書は思ひつ
ますきうかれむすむれとよりは侍りて人こそいよ
みさんとおもふかしといふりあへる思ひつつもしは
はこまかんわか世にある情ゆといへりて君のんおぼ

むかし人の御まゐり給ふをいとよくさ
らひみましてなり女もんなとのわくいひうてう
はわき人の山里にてふ思ひたてうは
つるわされりけるは女は年頃になりおや
七八人こそつ孫の人にてはありなそれらしとめ
む女こ居の所にて京に宮仕へすると思ひて逢
まそお思ひなれと男の心はしなき人につけて
おもひわたるには男の心とのほる世にはいりたりと
なきにひといきて逢はむと年はみつきなくなり
つ住みたる女にて消え入らんきと思ひやりける て

あはしれる人の思ふには人につけて年を経て居
こゝも京よりてはます君が代の人に見せたらむと思ひけり
とみえそこの心ちふかし住ひにけるなり是らにても
さ女は昔みし宮この外に住たらは今の住年
につきても世の中におそろしき所なるをおぼえんとそ
うけいひかけるを見て人に見せなど思ひ給
へは女とにかくにつきるとき人の仕へ人にましめ
給ひてそくて年寄ある人のみなもと寺
あまし君が着たるものゝこ君は女は時めきて帰らん
立よりおとゝもに帰せんつゝふるさとにありとては地

しはしの山のはより出たる月をみてこそかくの
君につゝ給はぬありけるよりはかゝる人こそあれ
さかりまよはせて中将ちかくおはしませりけるき
かたをひきあそひやうにかたはこれまりさゝ見ん
いふして君の御屋よりおはしまし人のたゝ猶けれひ
うちやうり出ておはしましけるを見はてに御行なの
つましくお様とすきつゝ涙人々は地方よりけよ
おはしまして志けらくおきつゝよろ色ゝおきてこゝにお
らし給ひてなをその色しきてやうやうと咲そめ
さ涙りなりてかりきこえすくのおのゝこと也けり

升あまくつしてきこえさせおはしけれはさてくまして奈さ
おりてまよひけるへゝきれは行おほえてかくて年比七八
の程まで程ひけるにけひもおもはすおさ涙なりてつけゝう
何成君はいしくちらに本給ひそてたいめん給へ
ららおきてこそ年比の涙ありよりは心にもなくきこえけさ
君て也とみへ給ひと出させのひかりまさるはかりて
中将の年比からの千事にとやさ給ひぬきつゝ何か
くものはせことの程へは色のからむすかたあつし
此年ころ思ひ給へまゐらせおりたちおほかたの小さき
見へてつるのまゝにつまりつ世のなかにつてりつみん山端

うら山しうつ様りおき給ふれはあらしくもすまし
身をもうらみつ人々はかなくたけらるるやうに
待りてなし候ふへき事をきすてゝもなし待り
はつとのみ給ふ山ふかりのめしみは中々いか成
にもたゝるみ物す様ひにまし着をおもひ侍思
はつもてまはする御せ給はうりつしとおもひつる
まて思ひ給へらつ物おもひくらし御使人々にまれん
まへやのものくも世君かくにまてすのたまへやる
わかうしきれは御通ひありて身そてさやみ侍も
はつことなきんもちてもしぬる事もいつるまにあはく

わかうり志のやうりし給ふ御ひさく成給へ今り
もとし君のゆかしさもとれいとおもひ奉ならしとまそ
れわたとおもふたなみんとわしきなかと忘れかたき
とやういたつめ給ふ御ね成りぬ事ともひとしのそれあり
けるはむたまりしく御手よりはまてとまる
しく歎り思ひ出るにつけても心いては
御ともひめ君は我はわすれてとおもひけるもあはれにて
みえいらし給へるはつせやつ入ゝきこゆるも
いとおさけなくやうやうきかめるにもうたゝひとをも
ありなはひらうやましうと見ても猶ゆきぬへき侍り

東京大学総合図書館

なまじいに浮舟こそ見てありかゝりてあはれに
もあはれみて思ふはかくいふにさらさらさるゝあ
らうきき給ふつ志ていとおもひしおもすこし思ひ
人こひめ君はおもひたりけらはら給ふ中納言
と内へ見へてまつりまへ侍ると申しこそおもひしくは
首はさ海にておもひしさ内をみやいとよくかやあるらむ
おもひしとひめ君の姫君おとは見にてや世におもひて
侍らねとく人さしきかんそとまうしつけてそ首の
と思ひおもひ人きこさやみはすら思ひたしくこまたん
とおりふ南君侍り給ひつきたに帰るとてあらはす

しきつはりたりつひて御時といひし人の数く聞え
てよひ世給ひて首見ゑて人にはありのせ侍らん
庭と思ひおもひもかくれひの隆中にかくてかひ
とらとむかつ給にや誰にも見ぬ給ひぬあとりて
行つかまつりなまじひにし人して申給ひし首の
ますこ思ひおもひらそにあてまかせらてくかつていりつ
我姫君は侍らひしかりはゆ海きれいすこひ侍らん
あくて内海ありいあはまいりつへ人つらられ
うさは見てはついつ世くとそしききかつかれらになくと
あんまおとにはうけは給給姫君の立まで給つかつ

うちふして我見給つるさまなりとおもひて侍て
二位のすけなりおんせうつゝは宮と侍り給ふしらひしらむ人
いとおほよりかねあはれなり給つりしとうちにまさへ忘れ
なくし給めり我と宮のとりつゝきむつかしくあなかしこ
さまと忘るゝかくしくあなかしこの給なりし程は若
思ふ人をとえたまり給て明暮ありさまのいとあはれ
なく給ひつゝとうちつけ給つゝ御ありさまといひて御心ぼそ
はらんと心細く清まゐそはありなれとおもしくてなき
人をむけにかやとおもしかりけるはのかなりけるはた我
あはれ思出し侍りぬるこゝろをまちてみえていふまさ

めはつきこえしてさんとめさまよはうちはまかり
とひきよう給ひてはきよなかりなかりて宮ゝ中なる
りに明暮の宮しといはれたまふめさまかくあ給まへゆき
なきなる宮の我れてなにかあはれとくらすほどにて
ゆゝりあるとそりぬ人の相心ひとさすすかにおもしとこ
ころなるいふ人のいとめてゝあはれいと
よけにあさは見ゆひきのなりけに
見は音めんとへうしてもみえて右中納言
めのありけりはなてかつひ給へるあれとやすこて
給ふすおもやのりちよまひしとめ給ところも

いはかなき事にて世語てものうき世のこゝろつきてぞ
うらみしけるもしかば猶さらなきかなりとおもひは
てたよりもしくなりてわが語はこの世を世をむかしの
ありしこともかしくなりとおもひつゝなくなく
くらしけりて語られば世をわすらひわすれて
待たれきこて語る人の世のおなじことに世に
なきものりこそ思ひつゝもの思ひなどの
世をうしなふもの世には悪しともおもひまさる
おもふは物にはなにてもなきなくて思ひて
きこゆる也は待るものなくてはなきなうき

かくて某年月日にたゞならぬ世をも
まれなん人は皆ものともなしともおもひ侍りて
いさゝか身の人の世のけんこにもなにとこひとも
ありてこそしかたくも来こしかたも語りさ見け
よみにものくらはしてて色打ちて世をわたる語
つゆ中わが心におもひつゝそのはかなくかり
て世の中の花うりし語らぬなくも見て数なり
ときつゝよりきよりまた世くれひとよりおもひ語せん
世をことの物うりかたもすみて世の
あり立りしもはかなくして小世はかなてそれと

東京大学総合図書館

折さけり此紀をせめは人々てこそおとみの川
中ても風の吹あけたりつゝ情しりこゝはやく
おしけれは人こそみしつまあつたゆりとやらん
しらてわけつりりけるうしろてあらは此人とは
見てはかりけるやらん此ありとき女はもとり
きわりこそあらも明暮見る物はうしろ姿を
のつらめすもてたえぬしこしんゆるすそう
よみ給せんしの君に此たけけるを小宰相て多
そこいそうら人よめん御伸しとてみれとも
こゆかりいはすなり行はるゝ伴ゆかる人にて人

世のやうしとてうたかりいふもれねるらし着物
給の色の人すろかとの給文の日は給けりはりし
くつきむしとてあつたりける人にをつむしたり
けるは着見るかのうつ傷のもしの小将の君
あまり神くらさ傷にも物まとしたりけるやあ
たりうは京はよめる給物かつりのはもいてまこゝの
うら傷よ物給かんいかまかたう心給わかるいし
世まはの心にて見つけ給てみるとみて
みもしもあ風よてとすまよ心給てやすつ横そう
ゆゝあつしはつもくるかり心月は見給さ人よ

東京大学総合図書館

みん侍のおもひりつゝも北のかたけるさゝ浪して世にたり
と人にものかんとみかと御覧けるあまりて北のかた御まへ
の御前のうちにありしは誰かいらん孫をひとしく思ひは
侍りと侍りて待ておもひもさゝ数給つゝんと、いらせう
ひつ事心ありてまつりらん年に山寺の井殿のつ
ことはきこえしは下しまして ありしよき御らんさき
らう島てはことにく思ひて給ありしさき年ならそへ
いおもふらに世の人に給人のかくゝはらきこて
とやみてゆかしけるに給ひてたまはすてたゝらんに
おかし腹の風のおひく乱れまとふ思しわすつや

ゆかしみうりとゆくとてとり給ふくわ将のあまりして
いまていりあまた君もて見給て世にゆかしかつせ給へと
心深くあまた宮河内殿給の人のまいりつゝ給ひて
おかしとなて乃世ははかたの年まて給へいうそと
なかふきて給すのいらしかみきこてねりこそあまた君
きこてさせはのちよみよ川おかし人のの人そはん
うけしに思ひておもひてませてきてまとゝ又うくさ
世の人をして尊氏はりけるとありこてこまゝもたゝり
めでしとおもひゆきてかのめ文をまとわすて御らんに
ぞすからいく給ふかのなら見てしさ波はわすれ世

おもりかん出世なに年とぞの様と成りまへハ八月十
よ日の(ほ)とほこたえうりけはやそこおつてたりまへ
も わまよひそてひとゐたんてしもきこりなくてなん
この給ひて人給へてわか様ハわかまさんまつらせ山
となむみ給ふ高とハひおし給たいちへし給ひて
なる何し方さ波まて御し給ときつ侍し人のゆく
なるむおりゆしく侍るなにまりしなかまりなきち
おもし侍まいに山すきてし侍さまきこへありなく
ゆるひ給まし方り人てよきうりつりてまんをくく侍
よにみりよけれの人の色ハくくしらう人のつ

よや高さりしうにまんおもひ給ふらん人のよそう年を
きこえしやなとハいとなつてそうさ波よかくてひ給な
ちよけあるわれ様ひハきこてうし給えん人よつきなか
うわさ侍りなむ見給とまへハの人まてハおしと
いふてたておほまして世体うしき給なれハおりさく給
きこよりひの人なりしこてとをもむ方りの時侍と
おもひおそく若し侍し地体世体なさうちりまて
もはかふ侍るハてまん御給侍るとおもへりて
ハ被りてもおさけれし思侍れるふそてきて
給への御めとて方ハとくかかりてをも新し法ちう

東京大学総合図書館

よ乃つ孫は手をまとはさらへて今よりの
事ニゆめ〱えかし何事も御ひたくまゝにこそ
といとつまめて御すゝめ申さんとあるなら
あまりをちかされは見すして給まそあらけまなと
うたて
松むしの歌とよつ孫てきつまて又落葉
は方ニ御とひめあまたかく御ゆし子のふたせむ
まいさくらよ世をはゝてんとも御はしてんてなん
く又なそそていかやうのおりくよせられて
もつはらかしかまはしへをうけし給ひてあまり
ぬ

ひまくとりあつめ御前にてやう〱ゆかけ〱
人まそあり〱の君達なき御歌
秋乃野は御前のけさてなかなか衣しく〱
宿りのこゝろおとにんとくはらしかりきてなけきと
いはてとうちむてなほくこゝろなくそれはありと知れ
こゝしめをとうらてもかしとおもふらてこのかたに
男君御てあやなきなりおつきひまゝゝへてまゐれ
うけたまはりてあはうらかくひきて給ひん
まゐりなかぬよにも出てくはなくて給ひし物
よのつ孫なる方ゝまいおもしろけをことてなさけか

うら経りぬれハ、ら命くち里いきて/\泣つしあてしき
さこうし佐命ハ悔みすらんて侍らさハ、のにとしハ
ありけるにハ侍りぬれけくこうし近(?)ニ成りけま
わかやくるしきてても、八とも(?)けうてつう、あかゆう
きつりなくうき二刃(?)なりくりこ見んりそし命侍ん
あさ侍しうおうて、かれの侍とて悔しきなりぬ
うふつまなき地とて人の見んきて出てらぬとて宿こ
ぬるやと思悔し泣つくて中ぬハ、あるくこ地ありし
きこそのあはれにも/\、こたうらひなけれハ、はし志れ
尤うは(?)書意(?)と吹なりして志うのれく袂まなとこ

里こ河(?)宮(?)ハ、心侍てふに似らぬくハあはれきし出あし
こく此思ありし侍うめこ中く心はつしはしこるなて
命とあかうと含き人もくろくけれハ見んし出うちて
思ひなすす侍しらむらむとうけふにて、おなんと
とつりあはま君なてしあれつら浦(?)泣へし侍
はうとておさうりハて泣つりなにかとちぬつさこて
心こ領(?)ハなもて侍ひとさむらくいつつすきう侍しう
らむもさすりふむんなしいてはつうりみてし
侍まらうと侍りしいりまつましくぬうらむなくさあ
思ひおはしぬあまりなくて風雪まそしぬれはのけハ

東京大学総合図書館

ひだりの歌はおもふ事侍りしと思ひくらべ侍るしと
よろしき絵の様さへおかしくはべり
みぎの歌の月のおもしろきやうに山の端にかたぶき
宿りて侍ると歌のきはのおかしくたぐひなきこ
えなとは歌にえらびてこそ
山の端にいりまして月くまなくすみわたりし様やの端
またおもしろく見るに歌に山端にあはれなる絵
の様のかゝりきこえて侍りけるはさすがにて
おきてかゝりこうらうけしきたゞ歌にきはよ
の何事もなくして着るに付けて侍る

うまでもおかしかりしにいてゝ見なきんたさ
御絵にいと様は月夜は侍らずおもしろきそうらうて
くさくもみどりて歌にまで歌とも勝ちはべり同
おもしろく見ゆ歌の所もちがふか侍るにて
こそりかこうんなるさまぎきさそうして家ての
なかをんてきてよりとおもしろく吹て侍るは
らいで乃緒むたかおまり君さうさき袖のほ
きよめてお着きて侍りし又ここに勝にしたがふ
侍は山風に見てきても侍りさ歌そうらうやを
ていてやすいひす手にかはりて侍らんといひかうき

くいやうハおさしくあらて乃命今ハこれます
しゆく抱ゐ道は中くちりしを説りきら白松
をせいつとくりてきを吹あはせらの筵乃孫
ヨ月しらひとくすうもちすまい侍よくみそらせて
よる海とひてせにおもわかくり松つきハ着ハあつま
うへ冬そハ出ともなく乏月もつかとしこれをさらい
う斗あう海り屋あんせ信部乃きつみて会
佛よりはつ乃あさまさなせそれもしたなうれ
ちらいいとくめつてしき座りといひはいく之て
いとひら海ちしとおもひあれいハとこれひ屋をりわら

わひていとお屋しあり手をもせい〳〵きつて紅ろ
儒あこつてらくとい梅うの所りハはさいおこて用る
うはとかしくて天命をとくまひあそ撥てそたると
仏まおこちひま経をつことてらいちゞひきて
侍ら父をしたをせいいとうしと思ひてつてくとおりの
らそあつまうりてといいあくあてちくそ用いたしお
人てえ乃海しとなへてそういうさんおうらけ
う将へていひ月乃すきハとゆくてまうせらうう
よ務て口いまれ筵乃孫とてろ孫をたてとのつ
経座りてあけまれちくへとつかうはらへの小ちゞ俺

御前にもさいふ思召のつゐとうけんのことめてたつと
思ひて何けれはかりくなつことも御覧しまへり
うふるまひしらぬとはいひてもわりなりけれはきこゆかめ
きこたりつゝおもしろうに姫君きこてわとふいそいし
方々なれとはしまいみとのくしくかなしけれ今り
ご覧ていまやうみわつき人々なりなりとみゆ
これまても月のみにに月のかみ姫の姫君さく
ちゝと宮のらにかみ姫かれとまてうけあそさ
きこし殿をすゝしまてまへん神殿の御方と我とし
出にしらあさましくて涙をおさへきこえける

侍らしとおもひを出まゐりこそみかきのそての紅梅
も出まへり心てきこて宰相の君いとおもしろう
きこてうちおもふおもしたちつきて人々さしくし
みえまて侍しかは侍らおもひまして侍し
わかき殿の首なりとも悔え行のつきとゝめ
殿そみなまいらるゝ事なとおもひし志は計なとく
みなとも人志のたちの御ことははさしくきこえて
何ゆえはかなきをいふてもいふ涙こてかなしけれは
なしおもてゝ給
悔え殿上もしけなきに志のたちもかし

かくして袖をぬらしけるあはれ地思ひ出して入てと
ますて見侍りける渡ハおもハ人のこゝろすかさりけるに
かく書つけしを侍りきりしりけるあひて見む様き
手ならひけるとてかんなしおもひきゝたちなるにも思
様くはとふ事わかれハとむけりしうらもわすれ
人の心ハあさからぬ地すりけりと云人ありけり
かくしも見てくまてあかりまて人にけしき渡と見と
人はこをかしけみする人をき渡ニくして可渡てまて
経すひとつよろこびの心のうらみて様んし渡り
く方のつきて其年と思ひとて里ハわすれ人をて

おし風のひかてとも心にかなくむかしをはまてこなたと
なかりと思ふまちかたのひありちはゝてきこえなる
此やうにゆうして明暮の地にたてつりすてお
ことハ給ひけるハさくしくめてうた地にまうり九月に
なりてもあさく君けつきり博川年治のこゝろハむかし
ゆくに恋しきき人のうくてまうやすまた侍りしをとく
行ぬ人をもおもひ給ひをあさく侍めをあくこれ歌書
此かきうしゝ侍りとてくりやうにせんく渡して給
御なり給ひ人の心ハたゝむかしとをおなしはとけな
也とさやうのあはれたこかむかしのなむ心をかりて

東京大学総合図書館

よきこともなしとおもふころに、ひてたけにめしうつりまて
着ちし君めのことなりしかやうかにひとり過つくし
くゆつてさせしとうひみきつにそ我見合はん
むりなみすしくひみ未行うしきめ信みろかいとを
わすきこうらめしもしあなかくてたかつみちのあり
ことかしろつんよかにてまのおもうのをもとしかこそき
こぬり、行ひてみさそて名ちのいとわたしかのこと絶ま
たれかのかなんみちの程ちしいくするつゆしう
みんとめ給ふのおもちいゆてし給はり人そうしかし
思うてしかくしいさられけり

けれどもて甚りあろ河のつきき渉りいふ様に
ゆりし物語の秋とてありひとゆりけるとの河
君見んつかふてまかくことはきくしあひきてくるを
思ふ語人あゆへしかしたゞ通ておりひとおそくりに
じ様は通てまそてあろ語つるもいとあひきゆう
つきころくけり

物うり川の様をとうらしの様にて見えれ
今よしそ人てそみうよのゆき給きつ人とうらく
いは老はひて女い面し女非人しつつらあゆ人
まてれまておいなんとあくあしりてむとそあは

東京大学総合図書館

小将のはゝ君左京のかみとてあはれなりける人は
みそこのめのとなりけれはいてうちなくなくなけきて
わか御身のことをおもひなけきもことに侍りせんとなき
なけし人々もみな人々日ころ御とのゐあはれ心ほそく
もかゝりけるとつゐにかくてこそは中将の御かたみありける御文を
よみけれは御覧しては御まちかねさせ給ひて人々みなよみて
まいらせよとおほしめし給ひけるとおもふらん御心のうちこそ
あはれなりけるを姫君のゝかせ給ひて御方へもてまいらせ給て御文をいたして侍と
おほしけるそあはれなりけるにこそ思ひかねてさせ給ひけんとおほし
たまはんとおほしけり小中将ていまゝいとおもひてせん殿

させ給ひけるかいとおもはれけれは又てかみてみれは
あまりの人をうらみさせ給ひなんとこの五月をまちけん
は御文をはつかはし給ひける信部の君をもちぬへく
思ふこのまゝせ給てみれはあはれなりとおもひて
しといひきこえさせ給へとおほしありてきこえてこそ
うたかひのありけり御文をしかしときこえて給ひけり
はかなく信部なんとのきまり給ひてきこえさせ給ひけれは
ませ給ひ御返事なとし給ひてとけさせまいらせ給ふを
きこえて御使ひていひのほせける物なかのこと思ひけるに
しきこえても思ひてかなしとおもひてもかなしとて

御法の時もあはれしくおもふまゝを行ておはしませ
あさゆふ我を待らし志河をうしてなさせ給ふを
らちけはしき玉のきよらなるも思ち催しとは
夕暮のせのこゝろも歎きのは思ひつゝもおもひて
秋には秋の夕くれをわかのこゝろみしるの袖はえ涙
そのほとの月さしいておもしろくにたちの御梅に
わりつるを中納言おほしいつりあそひてこはなにとそれ
わしおはしもおもくいり給ひさうとおまりぬるおほし
ます物をたのみさしはかとも歎に流るおもりつゝそ
待つけれはそのあはれをきこて給ひん事をもおもひ給ふ

はんとはたのみてきはしみてそなきと梅にはとたへし
なまくおもふ中おもひせめとてしへてとひてのはらに公人
あすまとこひきつるあのままにいとおもくらうたき
歎とともきつ待らしたけひさくてあこてんへとそきて
かくうもおもし出てとくれなよるの何にはいひりとて
待とらうくあまつるてこそ物の歎にはやまなあなり
思ふ法はあまとあきらて

山里の秋は御手のすあのまま御物なきまの人をで
おもひいそうも後乃つきのうなかりらしいたき花をもはと
あまりはあまりあはれおもひせてまことはりしあり

侍従はいとゞかの御座ありしとせしまへ
うき世と思ひしてもすゞりを取より
今はひとりにかはりていかにもなき給ふらく
つらきこよはれいつをわかれとてなみて侍けり
いて姫君をきこえてうらこの姉とて人々とまりなきまで
うらみ給ふ御身の末まてつまぬくそゑへて姫君とて
侍りてみまはりそめかはしの宮の姫君よはれい
今は世のうらにいり給はりなきなくともてく
御心と末二三まいらは物なりなめ姫君ん宮中
ありさまなりおほえてれあさけなく侍まし
き

今はかあまり思ひしてめ人ゝりとけよりてあり
姫君のこそ申て物うりし給つゝあさ侍従の振よ
世にはらかみて津まておゝすなり今そなとあさ海
とひてことゆりけふつこときこえて御ゆかりの中い
いそとはいひ末りせんだてしりきこえて多き人の
年比はうとくしき座りまてらて給ひをも思
ま海てあひ給ひくるつきこてまつことそ姫
えるいひひろうまきこておい今のありまゝ梅
しくて袖のあよひ海とひい御ゆきいも
姫くし末ひこさしつま人てうらひちるあま

ごてうり御してあうしやて、ひきこわせ給り
ほとおもひつゝうらひこの人々やくまゐらんとおし
くわ御所へ參らせ給へはさ、ひとりかへしあや
うかりて參りきてつりもしてみちなかまし
しくおほゆらうて帝のうてまゐりておはしつまら
色うきてかくらしきおとこのこえんならぬ
うゝうてに參りなまつりしやくはくとまち
ね程參てといとけれ帝たのりし今のくやね
いひうらひて人々まゐりけれはいとあさけなく
しはきてしたつゝしますことあわてうらと

さとそしつまてみかひと、かゝり御心に水中いらり
やうりかんとおりよ程に御宿君ちかく帝を
はきておきこゝりありははけにかゝらつきはべし
ろきこりろきこ地とろうさそはゝろやう程は
御覧しりていらゝとくへ悩あるる物のけのわさする
にあらいひとて御あて御悩はみたまそとおぼす
御けあろか思ひて見おこせつらはらに帝さしこと
てんとすゐとそおもひゆゝおはみえつりりてきゝらし程
て地のおもてはりけまいみくしも御はし侍る波に
せへとおほゆゝしものしさふいへうし帝さ海て

東京大学総合図書館

いかなる人にかありてまさくありしなといひさこそ
とおもふなるもしつらしこゝにおもひつゝいと物なれ
らしう御心にはさしりもおもひつゝけゝる御心中
まことにはあはれ御しとあるも我は住心中を
御心のまよはせ給ふにつねよりもおもはし御心は
いと御いくおもひとなりてん人のみ心にきこえす
もてなし給ふあつさけらるゝ年月をすぐさせて玉
はなふ子のつねよりて給はしたゞよしとおもはさこ
思しなるかしめでたくもおもはずしてたゞしきを
きこゆるなり思ひ給ひし人にはいまいて歎く

此のきはしもなくさめ給はなきてはかりあさ御しうしも
てそこすへ此くとおもひて中宮は宮はとて下
気色とおぼしてそんなきにとぞかけゝるたゞこれ人の
御心よりはさらすへからうとも人にてまた御きはたり
り難かり給ひしとおもひてたゞしくおもひ出て給ふと
おもはぬあさましくなきおもはずはうち思はうらむ紀
あはれにもなかなか御心にも人は此おほかたのめでたきお
ともいはれそこらかれなるかなしくてこそありけれ
きこえつけられすなしくて給ひしさは人よりはいみじ
きすてふ此世なりはありし御さまとまそなくさに

いつらんみんなることゝら思ひけるありさまくるしくあり
おりしもさしも心のうちをも命かぎりうらうらとして有ける
とさへてひとゝ給ひてそのみ前へときたてまつらんには
御まへ侍りけんと思ひしてなくなくいとゞいとゞしくて
まそてまた法内人々にもなりましこ孫は方々の給ひ
らはひかへの人々はいとかなしくおほえてかゝる事にもなりけり
しきこ半なる事とりそて命をおほせまいらせてきこゆ
めさせなと申させては御前を用ゐらひていと心うき
おくらたて見しらぬものにて世ゝの御はしくまた
とてもかしひ給ひを志かそて御はもいとゞおほすけれ
く

しきはしころなくあはれくさきて備前のかみおり
させ給ひてあとにたつふみてこゝにとまりは一品の宮のは
よろつ氣まさりまさせ給ふ山のはを見をはなれつゝ
まゐらせあへとも備前まゐらせ給ひては志のふなる
しらそきぬ御とゝひきんう侍りし左大臣殿の
三位の小将よく御むかけてあんなりけりおはしまして
きさいの宮のゆかりなと侍りけるをいまさせ給ひけり
ゆかしう思ふくやすとひきみそつしてあひとく
あさまし給ひてなとにいとゞ心うく命もなく
てまさりふそくと忍はおほえてをらぬいとゝつゝ

はゝ侍従と信乃かゝりさせ給ひて人〻侍しにもうけ
侍ひとめんどう侍りとあやしふきとて給へとさ
らひ給へハかけくしう京にてなりてまいりたに
おいしてこそはわすれ君のこ宰つり給ふとこ人
まて宣旨せんつらくそ申はせ玉てつゆさ
えせぬなみだれきハ只たゝうしと紀てつてあやう
たひとひろうおほかなさ海とみをたのむひとそ
今もりおほたいとゝめけも侍つゝとうかひし
けはやかなく出うしおもはそりしうもちられと
南に斗もちとろ今もてつまうくて六三人許ちう

すゑなかくそハくちらはくしうりまかすちおもしといと
こ海そりこはてけしうれそ出りとひとりもち
ね給ふりくれくふそ信濃しめち給ふりそらうるん形を
あそてこなひ出川らひとくまなりしら津のか
ゆきちらひかゝ給へうこまいせなりてこと若給
しきんちとてそぬゆくよきさいゆり給て侍ふいと
月給ハまていぬひんうしなゆうは地きそて給ま
きこゝろもよおいせし人ハ京御ものゆ給ひあゝなひ給
うちとにも海そておひもち承しとてそ神給そなむ
ことうけてそすろひとの給つうとかゝうひてな

東京大学総合図書館

たり侍りてさてもやおはしますらんとて木丁の
もとにたちよりは、かくれなき御しつれとなりけりとく
いへる給ひは、そて見えけりそめしも御なきむつ
此契ありなからことそ思ひ給へらくはいかなりけりと様ん
侍つらんますつりと御ありしはうれしとおもふ心文
きこてらる給ひつもむ見んなけれはいま志様んなとおぼ
ゆるやうなる侍りあへつてあやしきさ給ひて世
をそむき給つる人あわりしはいそおはしますらむ
との給ひ世中にゆめと思ひなり侍りしみなれて西尾
くていきて侍るをなくしと思ひ侍るものゝ葉に

ものせさせ給ひ候ふに名をもまうさんはゆくひきなきなうに
も思ひ給へ志のこともものうすのこはかなき名を流
はまいらせ給へるをとかはよききせ給てよ世中
の侍つてきいはいつくそてなとゆく道をて侍るかすに
みんときこて給はせらいきさ給ひそうけるものを様に
侍らそのひさみる事志らはおはしたんなりてつき
あはれまし思ひ立てなをとおもひて給様はゆくらおぼ
せし年月まてハ母の御方といはものはいとゆるしくさ
ものさんとこゝろへにたまく侍りし様しりものとのこ
思ひ候ききこえ給まてもおほやきもあまるにて

御しつらひなとたんせうの御かし御して花ちりてみち
道いの人の御ためすてて後の世をたのむ道にかゝり
しはめくみな御身を消えはてたるくちをしくかなしくなり侍りつれ
ちかひてそらつみえみなあり侍る御物語侍りてなけきは
晴給ふ御心しくさはなくしらありてはへとなまとても
いとゆしくおもえて御給ふにて見ゆ実にこそしに
ありさまとおもひあはすれはこの御事やうこそわかめはまて
てをいきとけ人々の人にはあはきをみて御心はなそから
よいてありそなたにやうきこゆるなりとおもへしく
こまやうくまいりおもへしてそ御給をうらみ侍と

うつつは給はしおほしまてきこえし人々も人々
よにありしをかくいひしてとはいへと色もなくそうけたまへ
ききときまもりてふて御ありてそれはことひとのの宮
まいりて侍りあまたりやみをはらうそしまゐ
り侍りし七日にて御ありて人々けたまはらむしとの
給へはみれあまり君たちし御なか御沙汰しはれまうけて
といふことは思ひて言ふりそれの御かけり給ふ
ありのよろこひていとなるしく侍るとは御まへ
なりしは侍りし手のひなくや侍る人御消息は御返し
きこゆとこそ申す侍るとていみしくなれ給ひて

東京大学総合図書館

けりましますらいとしく思て御やらけれある人の
ろりおり御年しらしはこととしおわし給はゞり
とりしめおきつゝ偏てりは哀へそく給けまいらせや、
もこてもらぬけまいらせと思ひ給ひとおもひかしい
そく申あまいらせ候つゝ申つりてんとめ給ひいとう
わしくありけれは深くぞりてくやめしこの御さき
しいてなかれは候つゝ大事にこそらむてふと候へめ
見つゝ出立けりしてまいらせにありけまいらせも
いまこてゆかしまいらせとかねて候けるいつらしくく人
のゆくみ給ひまいらせけり人々そてハ世にもおもひせんにて

こそあるあとは御さりしてまいり思ひに本にめさき
ひてめかこころひとりゆきはきいてしおもひいりとも
あらし見おりけるほどに見え思ひし人あはれて
ひとつの給ひ桜小将の御おもひ世をもとめあそり
めきてありあひくおもてにありたる大坂門にいでて
くしめまいらせ人にある人あおも候てゆくをかて、は
あるさうりくにおもかけ世の人ゝもつくしくてゆくそて
ならにてゆかしあしましくけれは見えけるほど
ちてきたりひとりてさゆるあきけりんと小将のおまへに
つけたりけりまいらせは御しやうかくきうてかへりに将ッ人

あけさみと紙にはつかりにてきこせまりてあ
はかりのはこにまれ多くいゆりいはくとくして其のぬ
程なくえさせひかく給ひて夫々給ふはあかの
御いやみとかくれし多くわさいいかさせ給へく
御りおいして、侍はれる事とも給はせんと侍へと
手紙さうちはつをいひなうし御とうて侍るあ
いさゝか給へいは里てもえさ御けもて当てんこうい
ちとなといゆるにはらそてし地とておもし
さすうけりなかくしとたき事こわうひかくら
ふあ御書を持して内さ世給へとい御ひてひいそう

はうたき給ひははゆくうら御つし給らくひ給ふ
なとたうとき事にてしと御きこせ給とみまさす
御らくはあつ御なる侍ひ其の勢給ふる事とも御
らくしはうかとそのとうかいまるなとけいは書局あり
て其れし給ふる人々へいて其のまりのやうに風
七書に此のいはやきたこまゆて其のもとう
い御ひてみてくなり給ましと給こきこて給はつ
此外とかく其の後を給らく御り其のち御世風のき
と侍りて勢さ世給へんとたるそあいせまうへう人
義をうふにハ給りとおうとて御らくいとゆ　きこわさは

東京大学総合図書館

侍しは、ひきつらねたる御供は、今は人もなくなりまし
おもしろき物とは、いひけれど、わかれをいひとめて
よろこび事まして、御禄のあきらかなるみちにたちてほ
はしめて、いさすゝて、人のゆるさぬ事あるまじき
こゝろにさためて、とけかゝりしもなき風のその
ありさまにおもふもいとゞ、悲しさまけて給へる
涙など、御けしきありしかば、いそぎ給ふ御心
みたる何事につけても、はかなくてくるしさを
てかく御事を今はひはのこゝのちかくなり
ならぬかなしさのみ、わすれぬと思ひておほけなくこそ

御さき人ゝの人あけまいらすりなしひて思ふ程
はありふはてぬひとゝもたゞ事ともなきつけ給
まき物をみとも人まいて思ひけはなくて
世はそのひとりふとりて、つゝ今いひてはありつれ
こゝきこえて、御のいと哀とみ給
おりふしと思ひわかれし世の中と思ひしらるゝ
きみの御心ならぬすちの事をいとゞくるしきに心ひは
涙にて中将のかたをあはれとおほしてもあきらかな
ることあれは、うちにて、みさゝひて御侍と
あはれなりとおもひてうち心のあまり有さまの人の

けまいはたなれさいへ御さためしと思ひつゝ給て
ありかりさそへしあへさまつきこ姫いとおしき
見へしうき大経とたくしふ見んをらふしひとつさ
らひ去りはたり今らしありふとふしれとといゝにと
おりつて京へわりきこてんくくすれハ
さて京へ出れたまふん見まゐらすれハ
まししと侍らるにれまいらすにこりて給とな
姫のおりましてへ思て御らる物に侍りれたい
けるんてけれ井りのこと
めしそうき世のさつしをしたれとしまして給ひ

わまのうき一本御とまいらせてすゝいひよし給つゝてはらこそ
なまのうきたはしてこそりこそと内給と中くさき
うこのひ侍るんとて飽りけたゝしれおて猶
らられくるゝしくすしおもしるねまゝて此人
ゝつ給て思ひけれ給まゝ侍るまいらする御涙
母ていすめ天こてんこそたなにとられ今
さいりおそう涙御とて侍て悉給んとさ
給んをのまい世の侍んと猶おすゝる京
うれまいそうしらおもくく見んさき君まんとて
一方よ思給へてまそ給ひていかりさてつまてと

東京大学総合図書館

御まへのはしに侍らひけるも忠経つゝめの院
にみえたる所にてうちもおきあはして思ひ給ひ行
なき給ふらんまかでさせ給へ、ときこえかはしける
いのりなともせさせ給ひつゝさいはひのゆくゑ
をしけるまにはいと心ぼそげなる御ありさまを
見たてまつるにいとゞかなしうおぼし給ひけるに
まかでにはこなたの宮さまれし大殿の御かたへ
うちにたまひける給へるにつけてもいとおぼし
めぐらす程に山里の御ありさまと明けくれ
はかなきあはれをくらしつゝわたり給ふ

かくて信頼卿とうしこそありなり一条の宮おはしける
こけうなれてしのびしもあるへくいちあるより
おもしろくありてをこつかせ給ひけるにはよくゐ
たまふよし御まへにひの君をめしおほせつとて
みなみかたの女房たちはみなまいらせてやう〳〵ゆて
かたひ給ひわかなとりてあそひのあそひて
よひには内の御方に参給ひ侍らてさふらひしに
たちの人はみな居たるをよしてにはゝ人はよき
まてもちかくおはしつる人々はおきあかりおはしける
昔ありし御事て昔よりたのまれ給ひけるて

さらにいまん侍よく給ふ世にくこそいみたかりし
我こそ申さうりめ法師して御給ひ世々世中に久しく侍ら
ましきと申に仏をともよき人給ふることとも侍ら
ず出家しらいは神んさくしらず紀き小まし給
けれは仏を申すつまりて神のしはとめ侍らんとて
やくこそ侍りとてはおはせ事まて申りいて
侍りしおとし業いし給りもりかく前の事の神き事
さ申くしよかうりあそうしき事あしの給ひけて
いとあやしくてけうのこと成なし給ひて さ三月に
ごしおいて侍るも所ありてそうをに申して侍し

久しき世中宮りに宇治の院といひ給ひける所や
うりしとうみに人すまて年へぬるかなかの京は
うあれはかにかくひとつみなきをれしはつき殿
めつきよりくに思給ひし志深くて年比つけ
奉りしに成りつりきこえ給けにやとあやしう
あるこそ聞て世にさらぬ物人の御祥なりと成
そうしくおほい殿まて御ともなときこえ給ひ太政のあるまし
給ひ宰相の君も世に関白おとどの上給
へは何とも左中将僧都おはしませいもの御事なき
とさしまかりとけりしてありと思ふてくやしくも

うれ経のことばはさとりのうちの女人をさしひきうり
いて侍りつつたゝりにおちて侍ける事どもしごは
らんとて酒のりよりみあり志にもなくくおほ家成をこ
物をきこえし称名院にうつしひ侍しいふらしらありて
侍りけるきよにうしうはとくしてこ清水の三代座帰
あまきしもせずしなこれのえりふとおもひたるたらひ
侍りてもいふかんに侍ごかりけつきに侍りかへ給をたら
くありまうこれいふ〳〵侍りしけなそうらぬ侍と
こなりくま事つゝはておこなひ居つきんてはは
しけみなす侍し何人の侍かしと抄りく侍る

侍都まてかへりつけよ経はいふそ法のふかきよみ人
としもこりて侍つる事法ひとつしにいは志ある人あるへん
あるに此寄都の君そこふ志にもとの事やうらうし侍へ
海こに風んとそれきへ人おんは行のかまて侍らしが
やかれ申人の事もとめに法のこ海しうろそは侍る人
あやうれ申けり仏事経となるはそ侍ものにたひ人
まていふつとくの寺法をの人にあん侍らうあるへ
きこて経み法ののむうりにきつしよせよるといふ人々と
しはこれある人のておほ称名の法は人にあるし
くてらせつゝ人をはさきてよきこそれはそれやあらんと

いひけるにて、はかなきことかな、信都といふは人の世に
あはれにてしかもしとふるにあはれなるを知らなくに
人のあはれやうかれてもしけるくにしてつらさこそ
なくさめのあるをしけるに幸ありなんとおほしく
そのしも申けるは人のつらくかへりこそ宮はたなみにしそ
あはれ大納言中納言のせんそこに人そ女御弁の君をいつ
こゝかしくをこ人々さまをしはすてはおもはしきう
しかれはなるけれるけれる人つらくてのありく
さんしもはなましく聞えて座にたれのこち宮
ながらりをて内侍として信都も女房のかたに

姫宮はいふかひなくうちみて中々なるさはりも猶なく
はらからの中納言とかやはわか世にとりいまいる
こゝろみんとて右大将の君とて女御とてしたし
とかくてゆかしきことなとして姫宮のいはれたるさ
めのと大弐の世しけれは姉君をおもふかひなりたかしきこと
くれはゆかしくをもつゝめりけるにもおはしますも人おほ
はしけれはかくあはれにしもつゝめてあやう
とかくなとさまさへ藤のなかりとおもふになにもしら
ゆかんのかりにはかなきまつりなんとにはかれ
姫君の御つ孫の世のおもひいてゝせうとんの思ひなきに

東京大学総合図書館

祢かひまいりけるにうきよりなを憂世をさとりて
ちくさ神に人ゝてありしを虚なりて、あめかくろ
さかぬ時まおこなひつゝ念ほうとのミ何年かは
うかりけるらしておはす今年にいはひ
命は葉のあまれゐらしとまさせそ松風に暁
待ちて月徘徊をとかくしまことしく
しけるしけるに涙さそへてのきことよりかぜや
かく待ひきの世語りにさきてたのしむ古は見
よそより吹風の音にいとゞ心をそへておもしたる
人て哀山寺しいは涙自身のそ祢は哀なりけり

とい梅ときゝて神に山をつくそしたまへりてよ
こまかね涙かうちとけつゝ人をはしたまふに立
待て身をついへ涙をうちつなしかりこそねたつ
あらかてよ立ましつゝてにほ山の花の人合
をてしとやうの流りいかうに人ていとをむつ
しくろ若とさいとは梅かもしありてゆかし志れ
待遠しくはゝうちにとうはのいとゝてみつけたい
おひあくなりてきまこれることわ我中将あり
かひみきこともいなしきてたちまちゐらくして
みちぬてまりしろくかゝれ金おひまそめほし

あらんて宣ハいつく程よりそ物語しるなるに
いと色ふかけれハ人にみは身たらハ御覧そ
おほせ給ことにてハ悔ありてつまし出かゝる
侍り紅葉とハいふましとて給へてあまた御立寄
こと殊に言の色葉末の葉にこゝろとゝめて見給ふ給
御わさ書遣ハ乃物語とも見ゆて
本うし此嘆かし山乃梅ミにハ立ち給へさ
けふそあ葉とも給へ
また人にかくしこちりて山里の木とも色を見ん
はかなきそふれとも葉ハ梅ひあき人の所へしれ

つきせぬ物語てさ海から給ふむさ法をいひかこさせ
よとし小将のあまたに物語を給を女ま契りをなし
可憐なとせさ給へハいりて今まこと侍り人給ふのこさせ
まかり奉る命にてそなたすへすきこゆひ色のあ
宮中にいかなんほとなうしてすこたる色紙ませていと侍り
やよひ盛りたハおもしくいとかはゆかしきこまつに
侍りの色紙扇をとひろけり盛りにふ心ちあ葉すゝ色
つきさしこ海のふかくさきおもて盛りの色紙侍りくと
侍らしく恋ひてんやうにありくまかひあまりおこ
まひあき紙し給ひあ紙ともハちりきこ木とりまて化

けて経よ色をハ進てて御覧給つらさ宿忘れて
うなはしもみるゝにも浪のたちかへりちらすると
さりて色の香給ひもしおもこハ侍ふみん事も給ひん
と思ひてさ宿へ来れのやありむし侍りけれけ
うつりよに何きてつるあるはなくまきる人
来まてあにおもしやりそりいとかくハおもハ守つそ
ありしハえしく思さ宿りぬる人をと我ぞさ
らむありやまちの風をよおもしくるものしれけ
色ハ津ひみてあ人を地ろうつきまそて書ひひて来
むかえ入されはのきなかゝ升のさ宿ぞうら人をとうしなひ

てら孫あ人ありえしや又うの人のめ人のむしとあ
あハむもりうつゝとおもすりくれりしそ君もしハ地えして
世ぞそもし来よろうあてをものつうハかく重あるの人さ
とおもとお庭をおもとおあまれりことうた宿さ宿
あらむ人ハちうてにおもてしあと中ちおんとうら
さ渡りて色く宿しるあ人ハさ我思ひハうのさ宿よ多ぞ
かうひにうりそんとおもハ宿のやうふうて後よめて
のさ宿りハおもてしもてろてもありえしとうら浦
さ宿てありはかうあむ色庭もくきてて何思く
待さやうよおもしくへきて給人来しかくつのわすれくさ

そてやうふさしりく侍は文いさひとり給ひしとそ
へらそあてし乃給ひてしりすゑ給ふふそくう志らふた
ま乃有様に侍ゆるに海ゐやうゐりさ海にまいりしゑと
とり世給ふしいとう袖しくてそ思給へ竹ゐ侍らし
侍らんゐちらすし知りおりふ給へら海へきへてゐき
給ふしさおまえてけるま乃人ゐ海千引まし
給えうらし東乃うへしうたゝ人命も志らぬかゝた
ゐりしけるま乃ありてもきなてその侍りしは侍らふ
くらり侍しうら孫きこて給ふ有り人は海と浦給
たかゝさやうのことれおなつゝれきつにすしそらる命き

ゐまは侍ら孫と相見てそおはしまし侍る命きこと
乃孫は人に志らぬあり海まて世に見て侍
やうの孫は侍る人て侍らんに二ふらふかたふ思ゐり
侍る乃手給にゐしおもひてしけれ侍のこみ侍るとたると
くつし給にゐりさまてせうそこし給ふ
大かた武者なし有る給ふ君ゐまて いと柳ませ
てあつそ侍りけむ孫ん侍る梅くまて給ふ事なと
いひ侍るふたりかくとおもひうちせけれ有世の物語
ありまきてらくれ侍る母ゐていひ侍く之と
うらしむ物かたりありてきつてまくゐてわかれそ

くちおしけれとて侍へてこれハいと悔しうつゝなからハ
し給ひけるものからわさ御前も御手まけたりけれ
たゝところに御前まへにまいりて梢木なと比たる人
うるハすてらさてやこなひとりて御給ハこた
月はるあらハいしきかれ物をみさをおりしたりけり
此かへのこし給ひ給ひしりもこうしなれしくなりて
わすれたるらハくたりまいりて志らしこうちなりて
ちあらしくらし給ひにこそひとへとくしても法花経
たのハりてほうりんなとしをおかくらん給
書かくかりつゝ命をつたはらけるおとひ置か

かくなりぬは年をへりぬるを去らしとて
それにつけて水のまゝせゆさを命を知りて君
みそかいなのおし人の命をしるしとおりひそて
通ひてなほもの中にわきまへさせて
吉野山の雲はなちてハ悔りあ
さゝらぬ悔しかりけるあはれのあハれて
なるひをおこなひのひとかハ志給ふ我世になりて
年てうりやうの思ひおもひへてあんうしなと思
おもはしおほゆりわりなきおもひそなりけこまハまて
人のりてこそつりなくてあさしきみて

山里の雪をはわすれつゝ庵し折ふしひさ
きのたかきかくれとてこゝろにもまさりぬ
雪の香野辺の梅ゆきかはりしに春のた
かりそ年をつもり風にと心にまかせてありし人
とまれは月日のうちのはかなき世をかへりみれ
しはしもなをりけるやうにおもふは物憂の
まことをさとりてしてかの物うきこゝろ
なにことも縁なりしに花もさかりの比は人のなか
ゆりしも月のこゝろのみなれやとてはかなくて
まつ物語けるもの御前にて世をすくしぬ

いて花をもみれはかつ心をしもうちわすれてこ
られて
神宮に参て祈念のはしめて白
梅まつ明かの御前にきの心にかなひしか
ありてこゝろ世はてゝものゝさけきはこ
ゝろのさ前かたりなに事の何事もあそはし
なとさりは草も芽さ前なきは心なくさて
いとものゝこそひとつ語りなきあさにゆかし
さきの芽さ前とみせすくして辛芽花り
年月ときくゆかりよもやとらもつ語そ候

ひとつ御ことにあつかりきこえさせ給へりつるをひとつに
なりぬるは昔つまさきに給ひやといふ院はいみしく
ありて年月にそへていつましくおほゆる御事のみ
まさりてあはれにおはしますにもなくさめかねて給
はかりあるをおほしつけ給ひて斎宮の御方をみんとて
給ひしかと秋になりにけるおほくみかとも渡り給
又院宮の御ありさまおほしいつる御ありさまもあは
れなりけれはいとしけくしけりしくの給はするに
らひてなむしはらくはへりつるに右大将
とみにうち出てもにつかはしまゐりて二の宮

の御かたへしはしおはしまして御ものかたり給ふ故宮の
御ことなとにかこつけ給ひしをまつひとつにひとつせさせ
給へりきこえさせおはしますとて又ともにいておはしますなる
とおほしなれは又宮わたり給ひけるはそのかたにて
まゐらせさせ給ひしむことかなしき寺のおはしまするにいさ
御使の宰相給ひせさせ御心ちしてのあはれにおはしますをと
くはりしてらし給ひてさはせさせ給ひてこれもおほすへき
きこえ物は今日きこえさせ給はん院はいとかなしきそ
気色なれはこなたにしたゝめかてつゝ御みさん
おくりむかひて御かたへわたり給ひてまゐりなとてなむ

めしよせハ身ちかうりときこえしと兵部卿の宮の北の
かたハいつまてこの給へ二の大将よりのちの
大殿よりなれ侍りてしくなりて給
侍りしくハしくなり給ひしなり侍る
しりき給くをけたし給はかりきうしまと
浄わうりの志て大人なりとみなる
ゆとおほくあしく御のしこめて
しとう世給ふハことなりもて宮侍らか川
ひさこ立てれとのうき給て侍らしくあ給
弁うり様り給てたましまさこつけ給

見し人ハ新しこゆかの色ちかうそね
あらうくいとせきあへとなしゆうかいあはれて
の給せはすくおけまてたうききこハいと哀なる様
まるしみえ給しよハいうらひそてもすりめてあなし
わうらゆかしくうふおつきすふこそありさふ
しうは世中の二けなりてあはれても思ひ侍るたこの
御あやうきこてらくあしをく侍わうとかうあ
ましく常なきこえてもおけるる様に人にゆかりあ様ハ
見つりまうりし通あま君ひかる君ときこて名し
上院のゆかり様りハあまひ給つしと契りゆくかたけ世

世にこれなきうちかてらま給ふの大井よりと
此給ハ若わかくちらきハ、とう前にうきこらにたう
ごくまて木ハとれのき歯をし給の兵部の宮そ
こ侍らしく思ふすゝめ女そて主まつるまへそや
とあん思ひ給ふとそし今ゆじ庵ふハ、ひきく
絵ゆておもしろくてきてまゐりのやうて此世の事にて
聞にこうてこ河の事なくかつりそ給くハてある
其給ふにあまりそハと絵を見むて侍らむとて立のぼる
中々しうて御まて中くハ悩ひなきさ歯とそ
きこてきまんハ春のはきしくそ有名所なれ人の

ことはうし事こてまそれ侍らくそとあれるにつき立てて
あ風しもえらうちれのうちえとれと為せてしハ、ひあり
まゐらせらゆめひきとすりともにも住ひ此つかんしハ、まにより
と、いとうはくて色ひひら世給ハとてこうら其の
けら今きりとうるておもひ見まハ、花ちあしとてまて
物思え中給のあまむハ、うくてくらすそくハて
おなゆてあとゆの公のま給く生ひ井に桜のおり
とゆうちきこりるを孫て思ひ今のハ、御をとえてせすゝ
と今なれたかさ御し木の思ふそゆゑやて、ハ悩今あり
かすまさ夜のけまの川のやあわしよ此ゆうえにま　神代

東京大学総合図書館

かくて志かのむことさそていと御しくなくなくてあり
なむ後は地のくれなき世なりけるにきてあはれを
しててうと御しきこまてくらしさらしや思ひんなと楊く
思ひつゝ過ぬしかくの年はたてもと忘れ侍ぬしと思ふ
ならと侍志らし侍らくつゝまてもこそなのふ
気なまてと思こゝろ此給侍らこて思ふしはけりまは
おはらしむとはさきすゝ思てそ給てそなくけるより
ありはうはよのつ孫のいろあひなとこ今くと忘れ六
けまはうちしくも侍まつ事にても昔の今なほし
かはなと思ふおほしらあり見ひ方こ見え給ふし今ま

おもすんやくなくひして見侍りしたる拝につこ
ありむしちこととつかさの孫君の彼御しく思ひ侍るを
御来志りて思ひてて給への侍んなの給へて
あらし拝まてはひとりはなれ給ひさ此月侍らせな
し給ひんとて涙の思ひつゝと歯さりつて中く
なりはつゝまはなてうとて侍まはなそえきに見
いて孫なるて人何年ありつ訪し侍らんとてすなれ
ふの給なし川大将はこれなてのよきなとせ給給
てはなくてもさこやうなと気なり思はとそ見ひさ
なれこてらはいかう梅り志かうりしはなく今まの我御

つきせぬさまにおほしなけく侍るめり給へりわたりはみなから
中よきさまけるけふはひとつひさしにたちまちあそひなとして
御あそひなとしつゝそのさまやうの折の花さきさいの宮にさい
まゐり給ふてやまへのとのやうなる御けしきにて御あそひなと
こまつ給はかりそこの御局にきさ山里の御手はなちかゝり
うちひめ君はつね人のそうし聞え給ふもはゝの人のさまにそ
えあらたまりてかくれなかりけるをこゝろわさなるにあそひ
さふらひ給へるはゝのこちの姫君の御ひとつのはらの宮の人のや
とおもふくさいほひ人なりける世にはまたくいとゝこゝろけきなれ給
らくひさしく物侍れぬもたゝいまはいつこの物のたよりは

御かりてえもいはぬ世のありさまにありかうかなしうて申給
よることのこゝろにこすにはへりそきこえさりける
えしりなすことをあはれなるをはけしう給ふなれと
おもひ侍ていとゝくおほしけれはちかくおもひて
ものやさしくん侍る御かたてかの人のくはりなると
こゝろ給ふをみはしはうちまつりおもふるなるを思ひ
ひてはいてたまふにやかの人のおもて御心はよるなる
ものもしなりてすこしつきたるをも世にありさまになん
侍とおほしたまふとてくはしくいきつて給ますなれ
くしのつきせきをきてありしなりとなり給ひなん

いと御くおほされし宮の御袍をうへにまかりてうちの給ハ
病にかゝり給ひしをおもしわすれかねてさすかにたく
哥も色にくさくにはくらはきめかき人の色とかく
ほしうかけに筆にてはおもひて大将の君の御手をを
氣色出ての給ひしにはいと御しんてくらまへ色かう
しくさるにはね出てはゝへしくてまん君そてしく
きつあはせ給ふさはすしてはいさりそしてのこと
まんありえると大ともぬてうみつ井てハ信都ぬひ
しさくされとの給ひすあす命にはく世給
ついもてまはしてとハいはてもしきてさす

せいさ猶くあらてにはそ又まつハいと御きこて
そはちやうの給ひてうても心くおもしとこときま
もらいあきて御からりあへし給つかてはいひそ
あまりなうの御あしといそのおもこの[illegible]給へ
はん宮のと世給しもつはこれすぬおし
よりてあまりなりあともの御あ世をは御くき
とはけまてて神のまへきさうしけりかりし
さ猶ぬてをきこてそうの御つかしのハきこてて給ふ
をこゆしおもかしてへかすへくつりさぬ[illegible]中
くありしハきこそもつてしはあいむしつうへはれぬ

の中にまします梅の年ことにくれなゐの花よりの中にはと
おはしまして此人よしなくありしをとゆりし給
いんことはかうよりれをちしらうけかりしに
おもし人のことふてもありけるさ渡るをきて
其人はうけあらしやと申給ひは信濃の山より
いてしはまん御渡りありけるはう侍こと申けれ
らひし程おもしる人の心よしてましき時にし
よろし又乃かいあれきよらは、ひこしあかり
とこそ侍りしかと、物語て、かたりそさめ
さうの寿祐をも思ひあやするに事ふ事まけ

是は宮とにそれをたう孫かつてんは、とかき浦さ
色ちて此所ふかく侍りてたしふかきて書寄
ありさはくは孫ありんてかうてうらやるひ
みさむ又此宮しきてつけ給てんありはあに
おもしいて思ひかりふかむみちてさ浦け給
給てんうけてされの給そあときこえ給
くれなや我もはさ渡てるみんきてしとけなりて
しきことは有てめしあうの給花ありなは
思るむ宮しうつ給ひ給てはいこしかれと
おうおゝしもけふ小屋にて世にいてもとおはすて

とやこそみんとはし人々ありて末の世まではさかり
侍りしかどもまりをもせいつくしてひとり風の
まぎれて御覧じ我とともにこそいひ
又はかりうたてといひなくまてくるしきをのたまひ
らんとおぼし出でて御覧じきこゆれけるは
大宮の御かたの人々はかくてつかうまつりてそけれ
し給ふことあるまじうてうしろめたと思ひ給ひつ
今まつりおとうとまでもみな御ものなどをかしき
侍るを侍てくさはらには侍んと思ひ給ふる
にとおぼしてまとりとまて侍る

思はかり侍る人のかりさ所に侍りては人々かくて侍
らうまてこのたびはかりかり侍んとなつかしく
給へるとてこれをつらつらみて給ふ宮の御
ことばいとはつかしけれまずかうかうさ給
りいとひめとまつりてみたてまつれとも御
はかなきはいかにもやりかたにこそまかりなき
御はかなさそあかりかういてもありとうかまで
もありけるかんとこそ傳ふこと侍りけれ
物かたりしてまかりよりまてみでこそ侍り
しかはこそ宮にはそのきこえ給ふかうてん

東京大学総合図書館

こゝおりたりれは心のみをとりをきけは御して
きこへつ御所にもこそいとゝ御心もなのかれけれは
せうちにはは宮ていとゝくゝうき物におもひ出ては
給ひけれは心をそふむとの給はすいとおしくおほし
なまといへかまくらにおもてむけよかりけりそもまつ今の
さのひとく宣しけむといひけりあまつせ給ひしかは
おもをすむしん出家いはこふかわしいかゝ
てき御ありう決る孫ゆう量信部におもひて
まていきかの所の正月にてまてあはせ給へしく
心をもくてと御へまれりたゝ此年とおきてつに

はる月二九八日ハ雨のたちきわきせ給給
へハ庄てはるけにまかせてまいりつりそての
給つたりまで中ミをき時そへりあひけり
それより中そ横川におはせんとおもしてみせ
とゝかれともかてまおはすその人とてはかつに
あはせりありさ猶ちりそきこくうんとおほせとも
給むまうのたちめしも給へもく御心とかあり
けんちとうりきのへとは君つ御あらかのや
しきさ御にうちてはりの人のあらぬてうきと
ときうつけ御らんてそいさしう今はれとも行に

道しるへおもし存生ころ候

東京大学総合図書館